

第一作品集の行方と更新版の位置

——太宰治の養徳社版『晩年』をめぐって

* 小田桐ジエイク

Rethinking the Footprints and Historical Understanding of
DAZAI Osamu's First Work Collection Bannen

Jake ODAGIRI*

抄録

新進作家にとって第一刊行の書物が非常に重要な役割を果たす。特に日本近代文学において「文壇デビュー」が作品だけで可能であったわけではない時代に、作品が単行本に収録されることで、はじめて文壇の注目を集めることが珍しくはなかった。太宰治は例外ではない。一九三六年に太宰の第一作品集『晩年』が砂子屋書房によって出版され、次第に太宰も注目されるようになるため、改装版や改版が刊行されるようになった。結果的に、太宰の生前に『晩年』という書名がつけられた作品集は五冊になった。しかし、その中、一つはこれまで注目されてこなかった。それは、戦後に出版された養徳社版『晩年』という作品集である。本稿では、『晩年』の各版の成立の経緯と出版をまず確認した上で、養徳社版『晩年』を詳細に分析していく。特に養徳社版のシリーズでの所属や戦後の位置付けを考え、この版の『晩年』を捉え直していく。

キーワード：太宰治、第一作品集、『晩年』、出版、パラテキスト、日本近代文学

1、はじめに

太宰治の第一作品集『晩年』は従来の研究や評論において重視されてきたが、主に収録作品の読み方や作家との関連が考察されてきた。特に自伝的な作品として『思ひ出』¹⁾や『道化の華』²⁾などがしばしば取り上げられている。しかし、従来の研究や評論の多くでは、書物という媒体としての『晩年』が注目されてこなかった。本稿ではこの課題を取り上げ、太宰の第一作品集の道程を考

* 筑波学院大学経営情報学部、Tsukuba Gakuin University

え直していきたい。

本稿では、まず、従来の研究や評論では『晩年』がどのように取り上げられてきたのかということを整理し、『晩年』に関する研究の現状を解説する。そして、『晩年』の成立と出版の過程を簡単に紹介した上で、太宰の生前に出版された『晩年』の各版を確認しておく。その後は、これまで注目されてこなかった『晩年』の版の一つである養徳社版を取り上げて考察する。ここではまず、養徳社という出版社の戦後活動とその状況における企画されていたシリーズ「養徳叢書」の創設と存在意義を論考する。この考察を通して、そのシリーズの第十五巻として出版された『晩年』の意味を考え直すことができる。特に養徳社の言説や宣伝文の自身を読解することで、シリーズにおける『晩年』の位置付けを論じていく。その上で更に、養徳社版『晩年』に収録されている作品群は初版『晩年』と異なっていることを踏まえ、新しくなった作品集の意味を考察していく。養徳社版『晩年』を「更新版」とした上で、戦後の社会のために用意された作品集の意味と位置付けを論考する。

書物という形態から新たな分析を行うために、本稿ではパラテキスト概念を用い、作品の本文以外の空間や場を中心に考察していく。パラテキストとは、文学理論者であるジュネットの造語で、本文（テキスト）の外側（パラ）を中心に考察することにより、ある作品（群）が書物となり、その書物が読者に提示される状態、「つまりパラテキストとは、ある限界、もしくは完全な境界というよりも、むしろある種の敷居 *swi*ないしは（中略）、中へ入る、あるいはそこから引き返す可能性をだれにでも提供する「玄関ホール」³」であるという概念である。本稿では養徳社版『晩年』のパラテキスト的要素を分析することにより、その版の意味

と位置付けを考え直し、新たに戦後に出版され、新しくなった『晩年』を理解することができる。

2、『晩年』に関する従来の研究と現状

従来の太宰治研究には『晩年』に関する考察が多くあるが、そのほとんどが書物という物質的な媒体としての作品集ではなく、中に収録されている作品群を「テキスト」として読解する論考である。また、こうした研究状況において『晩年』収録各作品は平等に取り上げられているわけではなく、作品を読解することには「作者を理解する鍵が多く含まれてゐる」という傾向もあると言っている⁴。しかし、本稿では『晩年』の書物としての物質的な特徴を取り上げることで改めて『晩年』という存在を捉え直すことを目的としているため、本節では主な研究を取り上げ、『晩年』が全体的にどのように扱われてきたのかを整理しておく。

まずは、『晩年』に収録されている作品の観点からいかに読まれてきたのかを取り上げると、鳥居邦朗「『晩年』の構成」が作品集の構成を中心に考察している。鳥居論では、『晩年』全体を視野に入れつつ、主に『葉』と『思ひ出』という二作品を取り上げ、作品集の最初の二つの作品の位置付けとその意味を作家論の観点から論考している。同じようなアプローチで東郷克美「フォークロアの変奏——『晩年』の実験1——」及び「小説の小説——『晩年』の実験2——」という二本もあげられる。前者は、『晩年』に収録されている、いくつかの作品を津軽地方の「フォークロア」と併せて読解している。後者は、『晩年』が一冊の作品集になることで、各作品が意識的に配置されているとし、そうした作中出来事における作家の意図を「道化の華」や「猿面冠者」に出てくるメ

タフィクションの効果と併せて考察している。鳥居論でも東郷論でも、『晩年』全体を意識しているが、結果的に全ての収録作品を読んでいる、あるいは書物という媒体で捉えているわけではなく、部分的に作品を似たようなテーマやモチーフで取り上げ、作家論というアプローチで作品読解をなしている。

また、安藤宏は「『晩年』論―その再評価のための視点と方法―」や『太宰治 弱さを演じるということ』⁹、「『晩年』試論―執筆順位を中心に―」⁹などの論考では、『晩年』にはいわゆる「世界」があるという前提で、作品集全体を検討している。確かに、『晩年』は作品集として独特な存在となっており、作品集には作品と作品をつなぐ点があるのではないかと思わせる構成があると言えよう。しかし、結局のところ、『晩年』という作品集の中には各作品をつなぐテーマやモチーフを見出すことが困難であり、作品集を一つの「作品」として論考することがおもしろいということになる。更に他の研究では、更に『晩年』の作品群を読もうとする特集が多く、表面的に『晩年』全体を見直そうとしているかのよう提示されるが、作品を個々に読む結果となっている¹⁰。

なお、『晩年』の書物としての物質的な媒体に関する意識がこれまで全くなかったというわけではない。最も早く出るのは、初版本の出版に関して『日本浪漫派』の一九三六（昭十一）年九月号に「晩年と桐の木横町」の中には今官一「『晩年』に贈る詞」があり、『晩年』の書物としての特徴を取り上げている。例えば「体裁（菊判仮綴二四一頁）」や「扉（ここ過ぎて悲しみの市に入り）」、「著者（写真一葉）」などが書かれてあり、写真については「見給へ、この書物の巻頭の、君の写真の、いつたいどこに君があるといふのか」というような言説がある。こうした評言には詳細な事柄は取り上げられていないが、初版本出版の当時に『晩年』の作品や

本文のみではなく、外装等が注目されていたことがうかがえる¹¹。

また、先行研究の中では紅野謙介が夏目漱石や島崎藤村、井伏鱒二などの書物の中に収録されている肖像写真を取り上げ、『晩年』については「巻頭に挿入した肖像写真は、心中未遂とパビナール中毒によってスキヤンダラスな余光につつまれた太宰の、いわば葬式写真を演じていた」としている。こうした指摘は、太宰治の当時の実生活と併せて口絵写真を通じて作家像が形成されたという機能が働いているということを示す。他に、紅野論と同じような視点で、松本和也が初版本当初の読者を踏まえ、『晩年』の外装には「読者（層）こそが〈太宰治〉を成型していく鍵を握っていたとの見通しに基づき、同時代の現編成との交渉」¹²があり、太宰治の作家像の成型について論じている。更に、『晩年』の物質的な成立と出版に関する代表研究は山内祥史「太宰治の『晩年』——成立と出版」がある。著書のタイトルの通り、『晩年』の成立と出版について書簡や随筆、回想などの資料を丁寧に整理しながら、太宰治の第一作品集である『晩年』を書誌研究の観点から書物の出来上がりまでの過程を提示している。このように、書簡等の資料と併せながら『晩年』の出来上りを検討する研究は非常に貴重であるが、同時に山内論は作品集の成立と出版における過程や書物という媒体自体の特徴を解釈することが欠けている。とはいえ、考察の中に意見や提言などが全くないというわけではないが、その多くは推測にとどまってしまう。したがって、『晩年』を書誌学研究の観点から、出版物としての特徴や出来上がるまでの過程を解釈するための研究が必要である。

これまで見てきた研究以外に、重要でありながら、扱い方が困難となるのは文学館や博物館などの催し物である。例えば、「対談 太宰治・著書と資料をめぐって」という非売品の冊子が山梨

県立文学館主催の特設展「太宰治 生誕110年——作家をめぐる物語」(二〇一九年、夏)が出ている。この冊子はカラー印刷で、多くの書物の写真がキャプション解説と共に載せられている。この冊子は全てが『晩年』に関するものではないが、中心となるのは『晩年』であり、成立と出版が説明され、装幀デザインや先ほど触れた口絵写真も取り上げられる。しかし、同時にこの冊子は一般に流通しておらず、いわば限定品となり、その場になければ見ることができない資料であるため、中には重要な指摘があるが、アクセス性を考慮すると、一般的な資料としては扱い難い。また、これ以外にも多くの会場では太宰治に関する催し物があり、冊子やパンフレットなどが配布されるが、こうした資料の中に出てくる指摘も非常に重要であり、改めて研究の対象にすべきである。

こうした資料の扱い方の更なる議論はさておき、本節で見えてきたように、『晩年』に関する研究は多く存在しており、作品集全体を見ようとするものもあるが、なおかつ書物という物質的な媒体としての『晩年』に関する研究は少ない。更に述べると、ここで取り上げてきた『晩年』を物質的な媒体としての書物に関する研究は初版本が中心となっていることを無視することができない。したがって、本稿ではこうした先行研究を踏まえつつ、まず太宰治の生前に出版された各『晩年』を確認し、作品集のいわゆる足跡を整理しておく。その中一つである、戦後に出版された養徳社版『晩年』を詳細に分析してゆくが、その前に養徳社の戦後活動を確認しておく必要がある。養徳社の戦後の状況を確認することにより、太宰治の第一作品集『晩年』がどのように更新版として出版されるようになったのかを捉え直してゆく。

3、太宰治の生前に出版された各『晩年』について

初版『晩年』の成立と出版の詳細な事柄については、前節に取り上げた資料、特に山内著書に参照されたいが、本節では初版本をはじめとし、太宰の生前に出版された各版を検討してゆく。まずは初版本が太宰の第一作品集になった過程を考え、初出雑誌の中にバラバラになっていた作品がどのように作品集に編纂されたのか、そしてその後の『晩年』の足跡を確認してゆく。

よく知られているように、太宰治という作家の作品デビューは『列車』という短篇⁵⁾である。発表の媒体である『サンデー日報』は東京のものではなく、青森県の地方新聞関係のものであったため、「文壇デビュー作品」とは言い難い状況であった。しかし、そのすぐ後に『魚服記』と『思ひ出』という短篇を東京の同人雑誌『海豹』に載せることで「文壇デビュー作品」として認められるようになった。井伏鱒二の弟子として太宰は次々と作品を執筆し、第一作品集『晩年』が出版されるまで、発表していた作品群と発表媒体は次のようになっている。

- ・『列車』(一九三三・二、『サンデー日報』)
- ・『魚服記』(一九三三・三、『海豹』)
- ・『思ひ出』(一九三三・四、六、七、『海豹』)
- ・『葉』(一九三四・四、『鶴』)
- ・『猿面冠者』(一九三四・七、『鶴』)
- ・『彼は昔の彼ならず』(一九三四・十、『世界』)
- ・『ロマネスク』(一九三四・十二、『青い花』)
- ・『逆行』(一九三五・一、『文藝』) ※
- ・『道化の華』(一九三五・五、『日本浪漫派』)

- ・『玩具』(一九三五・七、『作品』)
- ・『雀こ』(一九三五・九、『作品』)
- ・『猿ヶ島』(一九三五・九、『文学界』)
- ・『ダス・ゲマイネ』(一九三五・十、『文藝春秋』) ★
- ・『地球図』(一九三五・十二、『新潮』)
- ・『めくら草紙』(一九三六・一、『新潮』)
- ・『陰火』(一九三六・四、『文藝雑誌』)
- ・『雌に就いて』(一九三六・五、『若草』) ★

この十七作の中、「★」が付された作品の二つは結果的に『晩年』に収録されなかった。その理由は出版の事情等があると考えられるが、改めてこの二作と『晩年』との関係について調査する必要がある。また、「※」が付されている『逆行』だが、『晩年』での『逆行』は四つの小品から成っている作品で、「蝶蝶」「決闘」「くろんぼ」は『文藝』に、「盗賊」は一九三五年十月号の『帝国大文学新聞』に発表された。こういう少し複雑な状態の更なる議論はさておき、ここで注目したいのはそれぞれの作品の初出雑誌媒体である。列挙している順番を見ると、次第に大手雑誌に作品を発表することになっていったことがうかがえる。また、詳細な検討はここでは省くが、これらの雑誌の中には現在なお継続している雑誌媒体が多くあり、太宰と出版社との関係を考える上で重要な位置付けとなった雑誌もある。

結果的に、『晩年』は十五作から成る作品集であるが、随筆集『もの思ふ葦』の中に収録されている随筆「『晩年』に就いて」の冒頭には、次のようなことが書かれている。

私はこの短篇集一冊のために、十箇年を棒に振った。まる十

箇年、市民と同じさはやかな朝めしを食はなかつた。私は、この本一冊のために、身の置きどころを失ひ、たえず自尊心を傷けられて世のなかの寒風に吹きまくられ、さうして、うろろ歩きまはつてゐた。数万円の金銭を浪費した。長兄の苦勞のほどに頭さがる。舌を焼き、胸を焦がし、わが身を、たうてい回復できぬまでにわざと損じた。百篇にあまる小説を、破り捨てた。原稿用紙五万枚。さうして残つたのは、辛うじて、これだけである。これだけ。原稿用紙、六百枚にちかひのであるが、稿料、全部で六十数円である。

初版『晩年』の出版に先立って半年前に書かれた宣伝文ではあるが、ここで注目したいのは傍線部にあるように「百篇にあまる小説を、破り捨てた」という箇所である。つまり、『晩年』には十五作が収録されているが、この随筆によるとそれが可能になるために、百篇を書くことが必要だった。また、これと同じような内容が後の作品『東京八景』¹⁸⁾の中にも取り上げられるが、「破り捨てた」ということではなく「燃やした」とある。このように、『東京八景』の中に描写されている『晩年』の成立の過程は脚色の対象になっていることがうかがえるが、同時に似たような話が改めて出てくることは、実際に『晩年』の成立に関して太宰がどれほど苦勞したのかがうかがえる。また、太宰が『晩年』の出版を期待していたことも、「文壇デビュー」、すなわち自著を有する作家として文壇に改めて注目されることがつながっていることもあった。

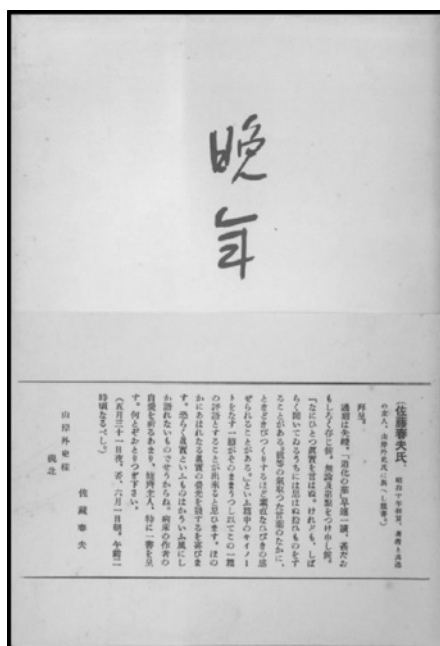


図1 初版『晩年』の表表紙

初版『晩年』は一九三六年六月二十五日刊行となった。書物の大きさは菊判で、フランス装であり、小口と天は未裁断である。表表紙に手書きで「晩年」の文字が上中央の縦書きになり、著者名は記されていない。背表紙に何もなく、著者名が裏表紙の左下に、手書きの文字になっている。帯付きで、帯の表側には佐藤春夫の山岸外史宛の手紙が載せてあり、裏側に井伏鱒二の太宰宛の手紙が載せてある。帯を取れば、初版『晩年』は非常にシンプルな装幀デザインであるが、帯の宣伝効果について少し考えてみたい。特に、新進作家であった太宰にとって、佐藤春夫の評言を表側に、師匠である井伏鱒二の評言を裏側に載せることは『晩年』を手に取りらせてみたくするための工夫の一つなのである。文壇に地位を有している作家たちの言説をこのように使うことは、「太宰治」という作家を覚えさせることにつながっていたのではないだろうか。更に、この初版本に太宰自身の肖像が口絵写真となっ

ている。この写真も帯と同じような宣伝の機能を持っており、新進作家である「太宰」の顔を見せることになっていた。

初版本は五〇〇部という限定された形で出版されたが、太宰にとって『晩年』は文壇デビューとつながっていたので、販売するというよりは寄贈することが目的となり、これがいわゆる自己宣伝の機能でもあった。太宰が次第に注目されるようになり、一九三七年九月に改めて『晩年』が出版された。この版は初版本と同じく砂子屋書房による刊行され、収録作品や紙型(版面)は初版本と同じであるため、その面においては特に変化があるというわけではない。しかし、外装となると、初版本と異なる点が多く、「改装版」と呼ぶことができる。主に四つの相違点があるので、詳細に見てみよう。まずは、箱付きになっており、箱の表側に活字で「太宰治著／第一小説集／晩年／砂子屋書房」と印刷されている。他に、帯がなくなった。帯は宣伝の機能を有し、特に佐藤春夫と井伏鱒二の評言がなくなることは『晩年』を目にする人に異なったイメージを与えることがある。新進作家であった当時の太宰にとって、帯は強い宣伝力があったはずであろう。また、同じような宣伝の機能をするものとしては、肖像なる口絵写真がこの版だとなくなっている。帯と口絵写真が改装版にない理由は明確ではないが、太宰という作家は直接関係のある文学者以外に、すなわち文壇の中でさえさほど知られていた作家ではないので、帯にせよ口絵写真にせよ、宣伝の力を持つものがなくなることは宣伝そのものをなくすと同じような効果となる。外装ではもう一点としては、背表紙に書名や著者名が印刷されるようになった。

次に出版されたのは、一九四二年七月十日付の砂子屋書房による刊行された『晩年』である。この版も箱が付され、改装版と似たような活字デザインが表側に「太宰治著／第一小説集／晩年／砂子屋書房」が印刷されている。収録作品は初版本と同じだが、この版の紙型（版面）をはじめ、菊判から四六判になったことなどを含め、先行研究では「改版」という扱い方は適切であることが判断できる。帯も口絵写真もない。更にこの版は砂子屋書房のシリーズ「第一小説集叢書」の一部であることになっているので、装幀デザインは更新されることになったであろう。すなわち、この面から考えれば、砂子屋書房は新進作家の文壇デビューを支えており、作家たちの間にあるネットワークの構築と存在を示唆していることもうかがえる。²⁰⁾

次に出版される『晩年』は、一九四六年四月二十日付の養徳社版であるが、次節において詳細に検討するので、ここで解説はしない。その次に出したのは、一九四七年十二月十日付の新潮文庫版

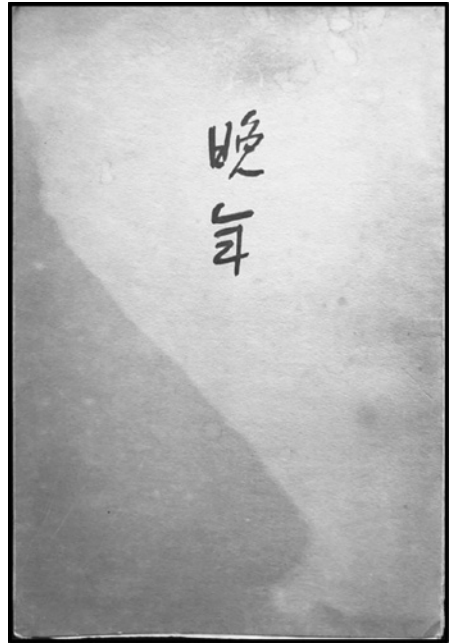


図2 改装版『晩年』の表表紙

『晩年』である。はじめて『晩年』が文庫本サイズになり、以前の菊判や四六判と比較すれば、持ち運びに便利がよくなる。また、中には初版本と同じ作品が収録されるが、跋文として豊島与志雄「解説」が付録されるようになった。後にその「解説」は評論家である奥野健男に変わる。新潮文庫版『晩年』の重要な特徴の一つは、現在なお愛読されているということである。今日の状況からすると、太宰治の書物は新潮文庫版に十八冊が出ており、全ての作品が収録されるようになってきている。すなわち、この新潮文庫版「太宰治シリーズ」はある種の非決定版全集となっている。²¹⁾ こうしたシリーズは『晩年』から始まったことが出発点という非常に重要な点である。

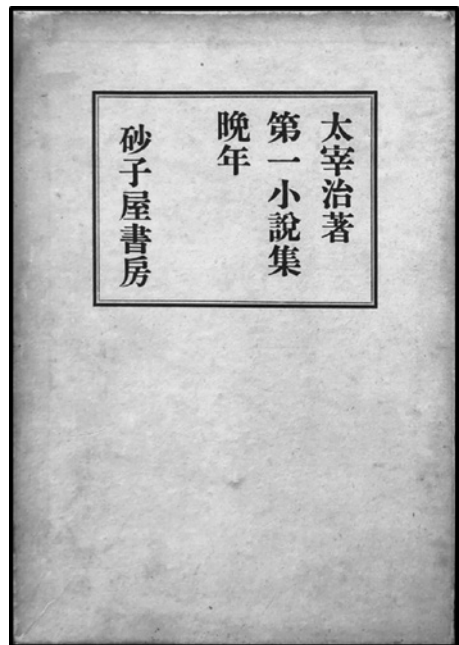


図3 改版『晩年』の箱

4、養徳社のシリーズ「養徳叢書」の存在目的

これまで見てきた全ての『晩年』の中では、養徳社版『晩年』が異なった意味を持つているが、それを論じる前に、まずは養徳社版が所属しているシリーズ「養徳叢書」の存在を検討しなければならぬ。それを理解することによって、太宰治の作品集とその意味を考え直すことができるようになる。

よく知られているように、養徳社は天理時報社、つまり天理教の出版社であるが、多くのものを出版していることが特徴の一つである。養徳社の成立と創設に関する詳細な情報は文責・元渕絃「創設のころ——養徳社創立六十年」⁽²⁾に譲るが、この冊子の中にある言説と実際に出版されていた書物にある言説を検討し、「養徳叢書」の存在を確認していく。

元渕の言説によると、養徳社から出版されていたシリーズである「養徳叢書」は戦後すぐ、つまり「昭和二十年十月から」始まったと述べている。しかし、実際に出版された書物の奥付を確認すると、最も早く「養徳叢書」というシリーズ名のもとで出版された書物は一九四四（昭和十九）年五月二十日の刊行で水上瀧太郎の作品集『父となる記』が見出せる。作品集の目次の前頁に、「養徳叢書発刊につきて」という宣伝文があり、「昭和十九年十月吉日」とその下に「養徳社」と署名されている。作品集の奥付では五月刊行とあるが、十月の署名というのは印刷ミスであったと考えられる。ともあれ、一九四四年に「養徳叢書」が企画を経て、出版に直面していたことがうかがえる。更に、その宣伝文の中身を見ると、冒頭に「長期に互る戦争」という言葉から始まり、「戦争は刻々苛烈の度を増しつゝある」などとあるように、戦争の真つ最中にシリーズが創設されたことが見出せる。ただ、ここで注目

したいのは、宣伝文の中にある、「養徳叢書」の創設された理由であり、次のように書かれてある。

決戦下のわが国民に醇乎たる文学享受の熱望いよいよ切なるは決して偶然ではない。

茲に小社が幾多の出版隘路を打開して敢て「養徳叢書」を刊行する意図も、この要請に応へんとするの微意にほかならない。

主として明治、大正、昭和に互る創作、詩歌、戯曲、童話、隨筆等の中より慎重なる検討の下に、明朗潤達なるもののみを選択し、一切を決戦下に適はしき読物として世に送る次第である。

出版報国の責務を十全に果さんとする小社の念願を諒せられ、本叢書の持つ使命の達成に大方の協力を切に期待する次第である。

この一部に戦時中という状況で、文学を楽しむことができなくなったことがあったので、養徳社は「養徳叢書」を作り、文芸作品を出すことになったということがシリーズの意図であることが読み取れる。また、注意深く読めば、戦時中に出せる書物はその状況に「適はしき読物」が慎重に選ばれたことが読み取れる。こうした言説が当時の状況に合致していることであり、この宣伝文が一九四五（昭和二十）年三月三十日刊行の高浜虚子『斑鳩物語』にも見える。すなわち、この時点で、養徳叢書の出版が戦後ではなく、戦時中であつたということが確認できる。

創設の時期は元渕の言説に間違いがあつたことは確かだが、それよりは養徳叢書は何を目的としていたのかということについて

更に考えてみたい。戦時中の言説は先ほど確認したように、とにかく「決戦下に適はしき読物として世に送る」ことだったが、これはどういう意味なのだろうか。戦時中にせよ、戦後にせよ、全国には「活字に飢える人々」が多かったこともあり、用紙などが比較的よい状況にあった養徳社はこの「活字に飢える」状況を打ち消すために、多くの書物を出版することにしたという。このことについて、元測は次のように述べている。

発足当初から比較的潤沢な用紙を持っていた養徳社では、戦後の印刷したものなら何でも売れる、といった焼き直し小説や頽廢文学が町に氾濫する中であって、格調高い本を出版して堅い読者層を維持していた。

すなわち、養徳叢書の出発点からは、「活字に飢える人々」に文芸作品を送ることが目的であることが分かる。戦後はまさに「印刷したものなら何でも売れる」という出版状況だったので、より質の高い文芸書を出版することが養徳社の狙いだった。先ほど取り上げた水上『父となる記』と高浜『斑鳩物語』はいずれも奥付に「初版二〇、〇〇〇」と記されているように、養徳社は積極的に多くの文芸書を出版しようとしていたことが見出せる。

しかし、これらの部数や言説の多くは戦時中と戦後とで混在しているため、戦後に出版された書物の場合を取り上げ、その中にある言説を確認しておきたい。まず、戦後に叢書に関する宣伝文はいかに変わったのかを見てみよう。全文を引用するので、少し長くなるが、多くの養徳叢書所属の書物に次の内容が印刷されている。

終戦後の日本は嵐の真只中に立つてゐる。私達の前には緊急に解決せねばならぬ幾多の深刻なる社会問題が山積してゐる。一としては日本の運命を決する重大問題ならざるはない。これが解決には真に民族の要望する正しき政治政策の緊要は言を俟たざるところである。然しそのみではない、更にこれを裏づけるに健全なる民族の魂の育成が如何に大切であるかを見逃すことは出来ぬ。

実際今日ほど我々にとつて、潤ひ豊かな心情と、高潔なる教養と、そして深い思念とを必要とする秋はない。

小社が現下幾多の出版隘路を克服して敢て本叢書の刊行を企画せし所以は茲にある。即ち、叙上の意図に添はんが為め本叢書編輯に際しては飽くまで慎重審議を期し、日本民族の心を豊かにし高い教養の地盤となり、人生に対する深い理解と智慧を与へ、そのあり方について正しい示唆を提供するものを幾多の作品中より厳選して世に送ることにした。幸にして新日本建設の基礎工作として貢献するならば小社の欲びこれに過ぐるものはない。大方の御支援御協力を切に願ひする次第である。

この引用は一九四六年四月に刊行された太宰治『晩年』からのものである。注目したいのは、傍線部を引いた箇所、先ほど引用した元測の言説と重なるところである。戦後の出版状況が望ましくはなく、「活字に飢える人々」も多かったため、その人たちの「心を豊かにし高い教養の地盤となり、人生に関する深い理解と智慧を与へ」ることを目的としていた。そのため、結果的に養徳叢書は一九四四年から一九四七年まで続き、「出版された本は七十点に上っている」と元測が述べている。

養徳叢書は国内外の文芸書を出版し、例えば一九四五年十一月に川端康成『愛』²⁵や同年十二月に深田久弥『津軽の平づら』²⁶、一九四六年七月に堀辰雄『曠野抄』²⁷、同年九月に佐藤春夫『新秋の記』²⁸などが戦後すぐの状況で出版された。また、この中に太宰治の第一作品集『晩年』と同じタイトルの書物が出版されているが、次節で詳細に見ていくように、この『晩年』はもともとの作品集とは異なった存在であり、その理由を考察してゆく。

5、「養徳叢書」の中の『晩年』の成立と出版

本節では養徳社版『晩年』の成立と出版について詳細に考察していくが、ほとんどの情報はもともと非公開資料である書簡を中心に考察する。²⁹すなわち、出版当初はこのような内容は公開されていたものではないし、またここでは作家の意図や精神等を論考するつもりはない。本節では明らかにしていきたいのは、養徳社版『晩年』の成立の経緯と出版に関する物質的情報とその意味である。

最も早くに出された、太宰からの養徳社宛の手紙は一九四五年十一月十四日付のものである。手紙の中には『晩年』が直接言及されていないが、太宰は既に作品群を担当者に渡し、出版はどのような状況であるかを確認する内容である。実際に『晩年』に関する言及があるのは、同じく一九四五年十一月二十三日付の手紙で、「さて、「晩年」の事では、いろいろ御手数おかけした事と存じます、御礼申し上げます、製本出来上がりしましたら、一、二、三部お送りくださいませ」とある。すなわち、この時点で、養徳社版『晩年』の出版が順調に進んでいることが分かる。やがて、作品集の刊行がそろそろ行われることは、一九四六年一月十四日付の手紙

の内容で読み取れる。その内容は次のようになっている。

拝復、ただいま小切手たしかに頂戴いたしました、ありがたうございました、どうしようかと心細い思ひでゐたのですが、おかげさまでした、御礼の言葉も、もどかしいくらゐです、
(中略)

「晩年」も、できたら部数を一万以上にたのみいます、何せどうも、研究費がかかりますので、「晩年」にはひつてゐる作品は、よその選集に絶対にいれない事にします、

ではどうか、くれぐれもお大事に、とりあへず心からの御礼まで、敬具

太宰 治

ここで二点に注目したいが、まずは部数の件である。前節で見てきたように、以前に出版された養徳叢書の作品集の奥付に「初版二〇、〇〇〇」とあるが、確認できた限りでは「一〇、〇〇〇」の場合もあった。³⁰太宰治の作新集『晩年』の奥付に「初版二〇、〇〇〇」とあるように、手紙の中の希望に出版社は応えたのである。また、前節で確認したように、養徳叢書は「活字に飢える人々」のために刊行する目的があったので、二万部は出版社及び叢書の狙いに合致する部数になるのではないだろうか。もう一点は、「研究費がかかりますので、「晩年」にはひつてゐる作品は、よその選集に絶対にいれない事にします」という箇所である。なぜこれが重要であるかという点、後に確認するように、養徳社版『晩年』の作品群は以前に出版されていた砂子屋書房版とは異なった作品群から成る作品集だからである。

実際に養徳社『晩年』が刊行されたのは、一九四六年四月二十

既に確認したように、『晩年』は十五作から成る作品集であったが、養徳社版『晩年』は八作から成る作品集である。目次は次の通りになっている。

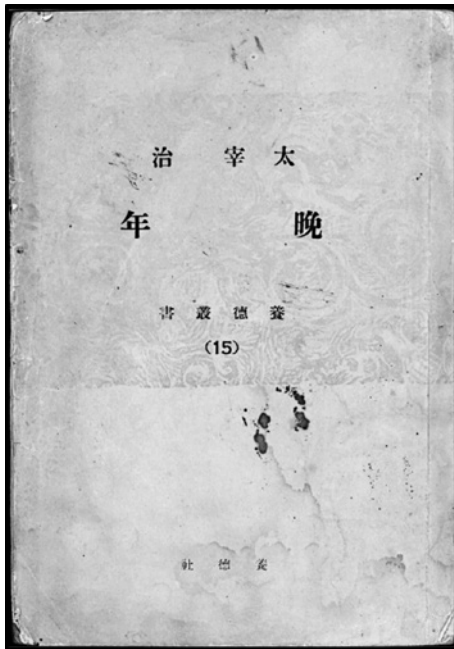


図4 養徳社『晩年』の表紙

日付であった。大きさは以前の砂子屋書房版の菊判と四六判とは違った、B6判というサイズになった。装幀デザインは特に『晩年』のためのものではなく、シリーズそれぞれ自体が統一したデザインであるが、『晩年』は養徳叢書の「(15)」であることになっている。定価は「¥8.40」と裏表紙に記されている。書物それ自体の特徴がほとんどなく、先述したように『晩年』は養徳叢書の他の書物と同じようなデザインである。しかし、養徳社版『晩年』は以前に出版されていた作品集と同じものではないことがこの版の特徴になっている。

もともと『晩年』にあった作品は『思ひ出』『雀こ』『逆行』『ロマネスク』『陰火』という五作で、『満願』『女生徒』『黄金風景』という三作は新しく『晩年』に加えられた作品である。先ほど取り上げた書簡の中には作品群の手渡しや「よその選集にいれない事」等の言説があったが、この『晩年』は作家自身も意識的に従来ものとは異なった作品集にしていたことを了承していたことが確認できる。しかし、なぜこの八作とこの組み合わせになっているのかは作家自身も出版社側も言及していない。目次の図を注意深く見ると、『雀こ』と『逆行』、そして『陰火』と『満願』との間に他の作品間より少し幅が広く開いているが、これが意識的な構造だったのか、あるいは印刷上の事情でそうなったのかは明確ではない。また、例えば戦時中に出版されていた、一九四四年八月刊行の叢書房版『佳日』の目次は明確に意図的な構造になり、先行論ではその意味が論じられているが、養徳社版『晩年』が同

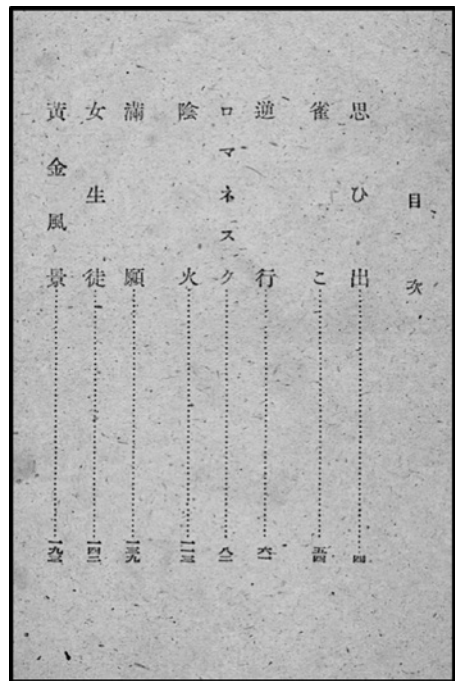


図5 養徳社『晩年』の目次

じょうな構造になっているかどうかは言い切れない。この議論の是非はさておき、ここで注目したいのは養徳社版『晩年』という書物の存在であり、収録作品の組み合わせとその読み方は今後の課題の一つにしたいと断っておく。

この『晩年』の売り上げに関する情報はなく、また同時代評価も確認できる範囲にないので、どのように受容されたのかは不明だが、少なくとも作家自身の考え方を確認することができる。養徳社版『晩年』が刊行してから一年が経過すると太宰からの手紙（はがき）が一九四七年七月九日付、編集部宛に届いた。その内容は次のようになっている。

拝啓、御ぶさたして居ります、二、三日前から、こちら急に暑くなつて、ただもう、汗ばかり拭いて居ります、さて、昨日、新潮社の人に来て、こんど新潮文庫を発売するけど、その際「晩年」の決定版も出したいと言ひ、養徳叢書の「晩年」は、名前は「晩年」ですけど、実は「晩年」の半分だけをとり、それから「晩年」以外の「女生徒」だの他二篇ばかりいれてありますので、「晩年」のホンモノの決定版をこの際、作つて置くのも無意義でないと私も思ひまして、でも一応養徳社の御了承を得るのも順序と存じまして、不取敢、御快諾を得たく、お願ひ申し上げる次第です、どうかよろしく御了承のほどお願ひ申します、
敬具

この内容からすれば、太宰自身は養徳社版『晩年』はもともとの作品集と異なっていることを意識していたことが読み取れる。手紙の中には、「養徳社の御了承を得る」ことや「御快諾を得たく、お願ひ申し上げる次第です」などという表現があるように礼儀正

しく出版社に連絡をしている。しかし、養徳社版『晩年』が「決定版」でもなく、「ホンモノ」の『晩年』でもないことが同時に表現され、この版の『晩年』に関する意識が大きく違ったことがうかがえる。ちなみに、この書簡の中に『女生徒』への言及があり、新しく加えられた三つの作品はいずれも一九三九年七月刊行の砂子屋書房版『女生徒』に収録されていた作品である。あえて「ホンモノ」ではない『晩年』を作るために、もともとの『晩年』から五作、そして作品集『女生徒』から三作を抜き取り、新しい組み合わせとすることはどういう目的であったのだろうか。先ほど取り上げた一九四六年一月十四日付の書簡には、「小切手」等が新たに組み直したことも考えられるが、第一創作集であり、作家が生前に数回にわたつて宣伝することもあるので、単なる印税の所得を目的として養徳社『晩年』が出版されたというのは考え難い。したがって、この『晩年』は別の意味を持つことになるのである。

6、養徳社版『晩年』を更新版として考え直す

これまで取り上げてきた書簡などから『晩年』を新たにすることにおける作家の意図とは何かに対する答えが読み取れるわけではない。しかし、書簡にあつた作家の意識と併せて、出版社の意図が出版された養徳社版『晩年』という物質的な媒体としての書物と所属シリーズから読み取れることができた。この解釈を踏まえた上で、本節では養徳社版『晩年』を更新版として考え直し、太宰研究及び近代文学史の中においてどのような位置付けとなるのかを検討していく。

まずは、先ほど検討していた養徳社の冊子「創設のころ——養徳社創立六十年」にある言説と、実際に『晩年』の中に印刷されているシリーズに関する言説についても少し考えてみたい。戦後の出版状況が望ましいものではなかった上、全国に「活字に飢える人々」がいたので、とにかく印刷するものがあれば印刷するという状況であったことは間違いない。そうした状況において、養徳社が「養徳叢書」を創設した目的は、「出版隘路を克服して敢て本叢書の刊行を企画」し、「日本民族の心を豊かにし高い教養の地盤となり、人生に対する深い理解と智慧を与へ」るとされている。太宰が養徳社の意図を実際にどれほど理解していたのかは明確ではない。しかし、例えば長篇作品『津軽』の本文中には作品が所属しているシリーズ「新風土記叢書」が示唆されているので、養徳社版『晩年』も「養徳叢書」というシリーズの目的に併せて出版されたのではないかと考えられる。ならば、養徳社版『晩年』はどのような書物であろうか。

先ほど言及したように、養徳社版『晩年』は更新版というようにジャンル化することができるのであろう。初版本を経て、『晩年』が既に更新されていたことは他の砂子屋書房版で見出すことができるが、その更新の場合は改装版や改版という程度で、養徳社版『晩年』ほど収録されている作品が全く異なるわけではない。ならば、更新版とはそもそも何かということを簡単に説明しておく必要がある。「更新版」というのは、文字通り更新された版である。すなわち、改装版や改版とは違い、更新版は外側にある書名は同じでありながらも、中身が異なるというものである。比較対象を取り上げると、初版『晩年』とその次に出された『晩年』は収録作品や版面が全く同じであるが、装幀デザインに変化があったので、改装版ということになる。これに対し、養徳社版『晩年』は

そもそも収録された作品群が初版本と異なっているという点で、更新版と呼ぶことになる。

この定義を踏まえた上で、「養徳叢書」の規模を把握しておこう。太宰の作品集『晩年』は「(15)」と番号づけられており、奥付の後にある広告のページには他に同じシリーズから刊行されている書物をうかがうことができる。例えば川端康成『愛』や横光利一『雪解』、武者小路実篤『愛と死』などが載っている。更に、この叢書は「日本篇」と「外国篇」という二つに分けられ、それぞれはおおよそ五十冊から成るものである。養徳叢書は一九四四年から一九四七年まで刊行が続けられたもので、「関西の岩波をつくる」ことが理念の一つであった。戦後日本の社会に、活字を届け、いわば活字で元気づけをすることも目的としていた。養徳社の冊子によると、多くの書物が列挙された上で、次のような説明がある。

ここで特筆すべきことは、養徳叢書が創刊されたことである。これまで、他社の紙型を譲り受けるなどしたために、これといった定型なしに内外の良書を発行してきたが、この叢書の創刊により、はっきりした顔をもった良書群として読書層に受け入れられた。現在、東京の国立国会図書館に保存される養徳社刊行本のほとんどは、この養徳叢書だ。

更に「二年間に養徳社から出版された本は七十点上っている」とあり、これも「養徳叢書」の出版した冊数を指しているのである。しかし、興味深いことに、この冊子の中にも、また養徳社の正式ホームページにも太宰治や『晩年』に関する言及はない。太宰は後に非常に有名な作家になったため、ネームバリューを考えると太宰についての言及がないことは不自然だと言っても過言で

はないだろう。更に、養徳社版の部数が二〇、〇〇〇部になっているため、戦後の「活字に飢える人々」が芸文作品を読めるようになることは、大きな意味を持つのであろう。

そこで、当初の養徳社はなぜ『晩年』の出版を決定したのだろうか。既に取り上げた冊子の内容を改めて考えてみると、「戦後の印刷したものなら何でも売れる」といった焼き直し小説や頽廃文学が街に氾濫する」という状況から抜け出すために多くの芸文書を出すことが養徳社の目的であった。すなわち、戦後の社会は「活字に飢える」という状態で、多くの出版社はとにかく売れるなら出版するという精神だった。そこで養徳社が『晩年』を出すこと、また部数の面では二〇、〇〇〇部を出すことは「活字に飢える人々」、その読者にとって非常に重要なことであったのではないか。この枠の中に、初版本とは違った作品の組み合わせになった『晩年』はその時代の読者にとって、何かしらの新鮮な読み物になっていたのだろう。

このように養徳社版『晩年』を考えてみると、前節に取り上げた太宰自身の言葉をも考え直さなければならぬ。つまり、「ホンモノ」でも「決定版」でもない『晩年』は戦後社会のために特別に作られた版であるという意味になる。既述しているように、この意味は作家である太宰自身がどれほど意識していたのかは実証できないことであるが、実在する「養徳叢書」がより大きな文脈における戦後社会のために企画されたことで、『晩年』がそのシリーズの意図に併せられたことになると言えよう。

ここで改めて、二節にて既に取り上げた、太宰自身が書いた広告としての随筆「『晩年』に就いて」という資料の中身を確認しておきたい。もちろん、本節で取り上げている『晩年』と時代が異なるが、その広告の内容と併せて読むことができるのではない

だろうか。冒頭部が次のようになっている。

私はこの短篇集一冊のために、十箇年を棒に振った。まる十箇年、市民と同じさはやかな朝めしを食はなかつた。私は、この本一冊のために、身の置きどころを失ひ、たえず自尊心を傷けられて世のなかの寒風に吹きまくられ、さうして、うろろ歩きまはつてゐた。数万円の金銭を浪費した。長兄の苦勞のほどに頭さがる。舌を焼き、胸を焦がし、わが身を、たうてい回復できぬまでにわざと損じた。百篇にあまる小説を、破り捨てた。原稿用紙五万枚。さうして残つたのは、辛うじて、これだけである。これだけ。原稿用紙、六百枚にちかひのであるが、稿料、全部で六十数円である。

けれども、私は、信じてゐる。この短篇集、「晩年」は、年々歳々、いよいよ色濃く、きみの眼に、きみの胸に滲透して行くにちがひないといふことを。私はこの本一冊を創るためにのみ生れた。けふよりのちの私は全くの死骸である。私は余生を送つて行く。

この宣伝文は一九三六年一月に発表されたので、遡及的に見ることになるが、傍線部に「私はこの本一冊を創るためにのみ生れた」とあるように、太宰にとって『晩年』は独特な位置付けになっていることが読み取れる。したがって、更新版『晩年』が戦後の社会のために特別に編集され、養徳叢書に入れられることも重要な位置付けになるのではないだろうか。特に、作品集のタイトルが「晩年」となっていることを考慮すると、第一作品集との関連があり、「この本一冊を創るためにのみ生れた」という意味も持つようになるのである。また、このような枠組みで更新版『晩年』

を見ることで、これまで注目されてこなかった養徳社に出版された『晩年』という作品集を考え直すことができるようになる。

7、おわりに

本稿では、太宰治の第一作品集『晩年』の足跡を確認し、従来の研究や評論の中では注目されてこなかった養徳社に出版されたの更新版『晩年』を考察した。特にパラテクスト的要素を取り上げることによって、更新版『晩年』の意味と位置付けを考え直すことができた。今回の考察では更新版の収録作品の読解まで論考しなかったが、本稿で考察してきた書物という媒体を分析することで、改めて収録作品を読むこともできるはずである。作家と自著と呼べる書物について、山中剛史は次のように指摘している。

(前略) 何より己の作品を世に普及させるといふ点でも作家にとつて単行本は重要である。仮に、読者に読まれることがなければ作品は存在しないも同じこととするなら、コンスタントに新聞雑誌に作品を発表してもその日その月で消えてしまふそれらより、息が長く、たとえ絶版となつても世に貸本や古書として流通し続ける単行本こそ、とりわけ新進作家にとつては自分を代表する作品としてなくては始まらないものであつたらう。⁽³⁶⁾

本稿で確認したように第一作品集『晩年』は新進作家であつた太宰治の「文壇デビュー」を位置付ける書物であるが、後に別の形として次々と『晩年』が出版されるようになった。改装版や改版だけではなく、収録作品が異なる別の『晩年』が存在しており、

現在なお流通しているのである。また、出版社の言説や宣伝文を読み解くことで、更新版『晩年』は戦後社会に独特な意味と位置付けを持つことを見出すことができた。

今回の考察は養徳社に出版された更新版『晩年』を物質的な書物としての面から取り上げてきたが、既述したように作品の面からも更新版『晩年』を考え直す必要がある。特に収録されている作品の選択と組み合わせはどのような意味を持つのか、初版『晩年』と作品集『女生徒』の作品群から取り出された作品には相互関係があるのか、また養徳叢書の目的とどのように関連するのかを改めて論考していきたい。このように、更新版『晩年』の物質的な媒体としての書物の意味と併せて作品群を読み直すことで、この版の意味を更に深く考察することができると考えられる。また、本稿の方法論を他の作家の場合に応用することによって、新たに書物と作家、そして作品との関係を捉え直すことができるのではないだろうか。

注

- (1) 『海豹』一九三三・四、六、七
- (2) 『日本浪漫派』一九三五・五
- (3) ジェラルド・ジュネット『スイユ』(和泉涼一訳、水声社、二〇〇一)
- (4) 豊島与志雄「解説」、新潮文庫『晩年』所載(新潮社、一九四七・十二)
- (5) 鳥居邦朗「太宰治論―作品からのアプローチ」(雁書館、一九八二)

- (6) 東郷克美『太宰治という物語』（筑摩書房、二〇〇一）
- (7) 『国文学 解釈と鑑賞』一九八七・四
- (8) ちくま新書、筑摩書房、二〇〇二
- (9) 『太宰治研究』第24巻（和泉書院、二〇一六）
- (10) 例えば、『太宰治スタディーズ』第3号（二〇一〇・六）における『晩年』生成とメディア』及び『晩年』前後——研究論文』や、前掲の『太宰治研究』第24巻（和泉書院、二〇一六）における『短篇小説集『晩年』と収録作品』などの特集が設けられている。
- (11) 同じ『晩年・桐の木横町』の中に澤西健「王者の宴」という評価もあるが、『晩年』の物質的な姿に関する言説はない。
- (12) 紅野謙介『書物の近代——メディアの文学史』（ちくまライブラリー80、筑摩書房、一九九二）
- (13) 松本和也「〈性格破綻者〉への道程——『晩年』・『創生記』・『第三回芥川賞』（同著『昭和十年前後の太宰治——『青年』・メディア・テキスト』ひつじ書房、二〇〇九）
- (14) 秀明出版会、二〇一五
- (15) なお、「太宰治」という作家名ではじめて発表したのは随筆『田舎者』（『海豹通信』一九三三・二）であった。
- (16) 初出雑誌は『文藝雑誌』一九三六・一
- (17) 本稿における引用資料に「〔中略〕」「〔前略〕」等による省略、また傍線はすべて引用者による。
- (18) 初出雑誌は『文学界』一九四一・一
- (19) 前掲の山内祥史著書
- (20) 作家たちのネットワークについて、拙論「無題序文における自己宣伝の機能——太宰治の作品集『思ひ出』を中心に」（『阪大近代文学研究』二〇二二・三）を参照されたい。
- (21) 一九八三年刊行『るまん燈籠』という新潮文庫作品集に付録されている奥野健男「解説」にも「この十七冊で太宰治の殆んどすべての作品、エッセイが網羅された。新潮文庫版太宰治全集が完結したと言ってよいだろう」とあり、二〇〇九年刊行『地図』という作品集に収録される作品でやがて奥野が述べた「新潮文庫版太宰治全集」がまさに完結した。
- (22) 養徳社、二〇〇六
- (23) 収載作品は「伊豆の踊子」「夜のさいころ」「寝顔」「春景色」「禽獣」
- (24) 収載作品は「あすならう」「チャシヌマ」「エエデル・ワイス」「志乃の手紙」「母」「帰郷」「はぎ葉」「山の小屋」「幼な顔」「月の桂」
- (25) 収載作品は「曠野」「ほととぎす」「嬢捨」「ふるさとびと」「晩夏」「朴の花の咲く頃」
- (26) 収載作品は「新秋の記」「旅びと」「杏の実をくれる娘」「車窓残月の記」「秋立つ」「窓展く」「写生旅行」
- (27) 書簡の引用はいずれも『太宰治全集』第十二巻（筑摩書房、一九九九）による。
- (28) 例えば、一九四五年十一月刊行の森鷗外「栗山大膳」の奥付に「初版一〇、〇〇〇」とある。
- (29) 松本和也「戦略としての話法——太宰治『佳日』という書物」（『太宰治スタディーズ』二〇一四・六）
- (30) 砂子屋書房版『女生徒』（一九三九・七）という作品集に収録されている作品は「満願」「女生徒」「Caro Beat」「富嶽百景」「懶惰の歌留多」「嬢捨」「黄金風景」である。
- (31) 『晩年』に関する作家自身の宣伝は随筆をはじめ「人に送る」（後に『晩年』に就いて）と改名、『文筆』一九三八・二）や『晩年』と『女生徒』（『文筆』一九四一・六）、『日本文学の伝統に根ざすもの』（後に『自著を語る』と改名、『月刊東奥』一九四五・一）等々であるように、改めてこれらの言説を分析し、自己宣伝としての機能と『晩年』

の関係を考察したい。

(32) 小山書店、一九四四・十一

(33) 更に詳しくは拙論『変貌する太宰治『津軽』——パラテキストの観点から』(『阪神近代文学研究』第19号、二〇一八・五)を参照されたい。

(34) 版が重なったり、外装や内容が変化したりすることに伴う意味については、外山滋比古『異本論』(ちくま文庫、筑摩書房、二〇一〇)等を参照されたい。

(35) 元測前掲冊子

(36) 山中剛史『谷崎潤一郎と書物』(秀明大学出版社、二〇二〇)